

私は小学六年生の夏、父をがんで亡くしました。病気は少し前から分かっていましたが、日ごとに弱っていく姿を見るのはとてもつらかったです。最期の日、家の中が急に静かになり、もう父の声を二度と聞けないことを実感しました。

父を失ったことで、私の生活から大切な一部がなくなりました。食卓での会話も、休日のお出かけも、もう一緒にできません。悲しさと、心の中の空っぽな感覚をどう埋めたらいいのか、当時の私は分かりませんでした。非核平和作文を書くことになったとき、私はふと「戦争や核兵器で家族を亡くした人も、同じような気持ちになるのではないか」と思いました。理由や状況は違つても、「大切な人を奪われる」という痛みは共通しているからです。しかし、戦争や核の場合、その別れはもつと突然で、残された人は「なぜ奪われなければならなかつたのか」という怒りや悔しさも抱えます。

戦争は、人と人とのつながりを一瞬で引き裂きます。家や学校だけでなく、笑い声や未来までも奪ってしまいます。広島や長崎で核兵器が使われたとき、多くの人が家族や友だちを失いました。その悲しみや苦しみは、何十年たつても消えることはありません。私が感じた父の死の悲しみも、時間がたつて薄らいでも完全に消えないように、戦争での別れも一生消えることはないと思います。

父を亡くしたことで、私は命の重さを深く考えるようになりました。命は一人ひとりにとつてかけがえのないもので、誰かの支えであり、誰かの宝物です。それを人間の手で奪うことは、絶対に許されません。核兵器は一度使われれば、無数の命を一瞬で奪い、その後も放射能で人々を苦しめ続けます。そんなものを持ち続けている世界は、本当に平和と言えるのでしょうか。

戦争や核をなくすために、私たちができるることは小さなことかもしれません。でも、その小さな行動の積み重ねが、未来を変えるはずです。核兵器の恐ろしさを学び、次の世代に伝えること。争いではなく、対話で解決しようとする姿勢を持つこと。人と人とのつながりを大切にすること。これらは今すぐにできることです。

父を失つて知った悲しみを、これ以上誰にも味わってほしくありません。世界中の誰もが、大切な人と笑い合える日常を守るために、私は声を上げ続けたいです。戦争も核兵器もない未来をつくること。それが、私の願いであり、父への誓いです。